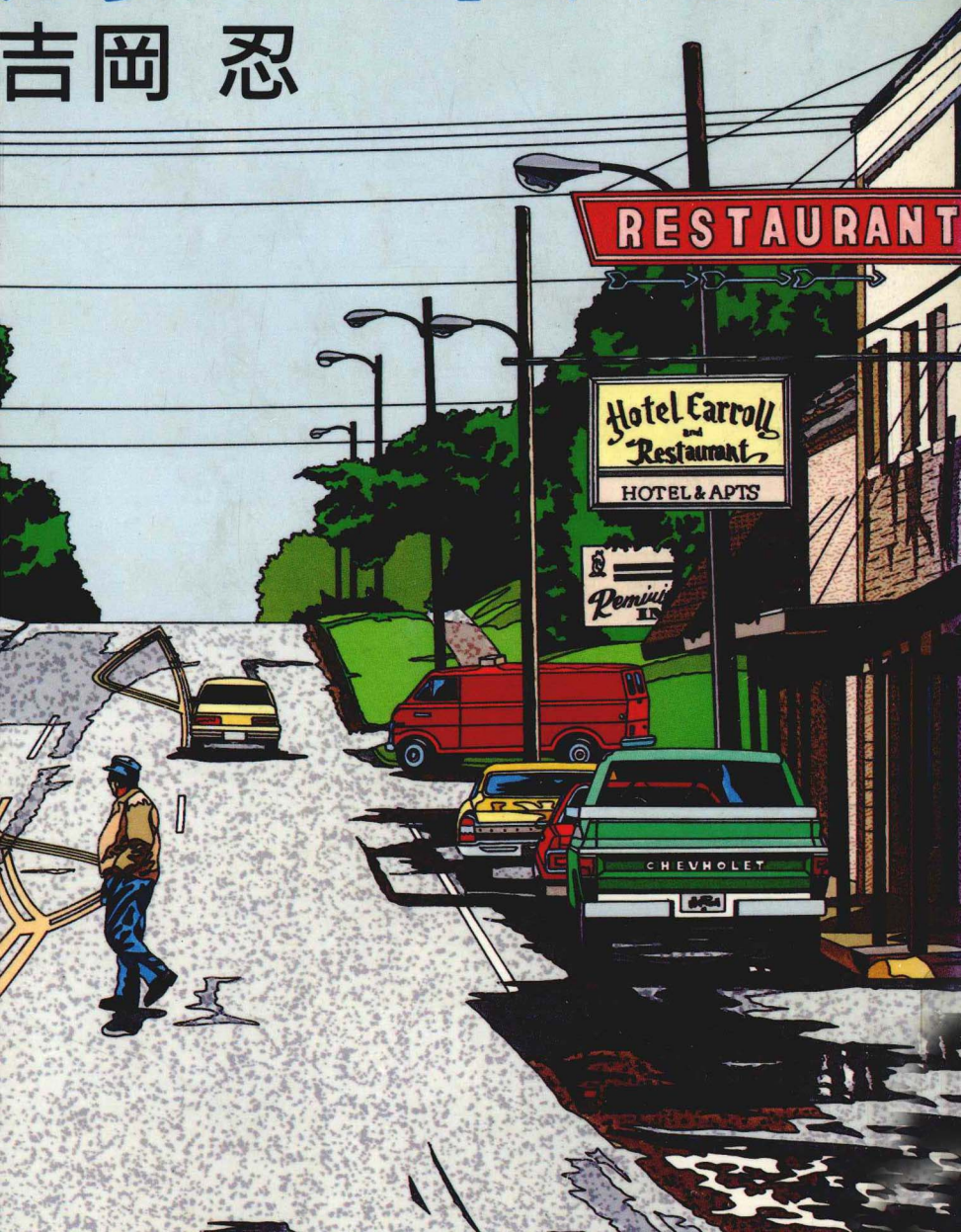


ガリバーと巨人の握手

吉岡 忍



と巨人の握手

吉岡 忍



ガリバーと巨人の握手

定価一三〇〇円

昭和六十年九月十五日初版印刷
昭和六十年九月二十五日初版発行

著者 吉岡 忍

発行者 嶋中 鵬二

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二丁目八番七号
郵便番号一〇四 振替東京二二三四

©一九八五 検印廃止

ISBN-12-001422-3

ガリバーと巨人の握手 目次

プロローグ

7

1章 フリーウェイの失意、駐車場の体臭

24

2章 ガリバーと巨人の握手が生む、新しい星

44

3章 街頭で暮らす人、路上の人生

62

4章 部品地図に沿って、思想は改造される

80

5章 クロワッサンとサターン計画

99

6章 地下鉄道に乗って国境を越え、聖域へ

126

7章 瀟洒なエゴイズムが見捨てた都市

152

8章 清潔な工場で沈黙する労働者たち

176

9章 ハイ・テック原理主義の焦燥と情熱

200

10章 追隨する能力、懷疑する力

230

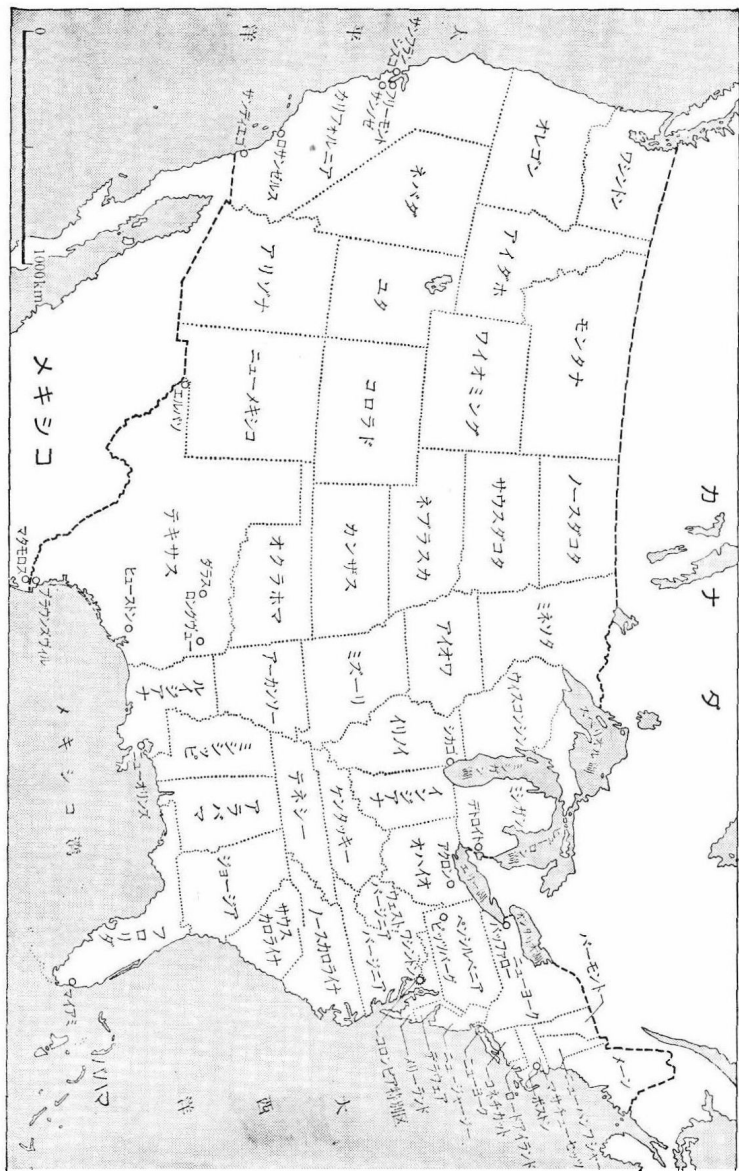
11章 神からは遠すぎる国境の町で

253

エピローグ

280

ガリバーと巨人の握手



本文関係地図

プロローグ

灰色っぽいジャケットをはおり、肩にデイ・バッグをひっつけたアジア系の男が写真に写っている。ハセンチ四方の、かなり大きな写真だ。髪をいくらか長めにし、首をかしげているところなど、気取っているふうでもある。男は、かすかに笑っているようでもあるし、まぶしくて眉をしかめているようにも見える。アメリカ人読者の目には、まだひよわさの抜けない年齢に映るにとだろ。

サンフランシスコ地域の日刊紙の日曜版である。キャプションには、こうある——『合州国での三ヵ月の調査旅行を終えて、日本人ジャーナリストはこの金曜日に東京に飛びたった』

記事の狙いは、日本人が日米自動車メーカーのジョイント・ベンチャーにいかなる関心を向けているか、についてである。アメリカの新聞は見出しにはめったに感嘆符をつけないけれど、これには派手についている。『タマゲタ！ ニッポン人にはわが街フリーモントは有名なんだそうな！』

写真の男が、たしかにそんないい加減なことを言っている。アメリカの自動車をモデルにして

きた日本の自動車産業が、いまアメリカのメーカーと対等の合併事業を、この街フリーモントではじめている、日本人の多くがこれの成否に注目しており、だから、この街も有名になってきている、と。これはひどい誇張か、地元記者へのリップ・サービスの類いだ。こんなつまらぬことを言うために、男は三ヵ月も費やしたのか。一億二千万の日本人の何人が、フリーモントなんていう名前の街を知っているだろうか。

おおかたの日本人にはおなじみのサンフランシスコの市街を、南に向かって抜ける。サンフランシスコ湾にかかるサンマテオ・ブリッジを渡って、日本ではとくに姿を消した塩田に沿って車を走らせること、たっぶり一時間。運よく、フリーウェイの脇に立っている市域を示す標識を見落とさなければ、フリーモントに到着するはずである。

このあたりは、丘陵の斜面から平地に沿ってゆったりと広がるアラメダ郡の一角だ。だだっ広いばかりで、見るべきものは何もない。フリーモント市の人口は、十四万人と少し。地元の日刊紙は三つ、テレビのチャンネルが九つ、その気になれば契約できる、ケーブル・テレビ局がひとつある。タクシー会社はふたつだ。

名所や旧跡といえるような場所はないし、ダウンタウンらしいにぎわいもない。市が成立したのは一九五六年だから、無理からぬことではあるのだが。知らずに通過してしまったほうが、話はわかりやすい。ハイ・テック時代の日本人には、それこそ有名なシリコン・ヴァレーの中心都市サンノゼ市が、十数マイル先に広がっているからである。

西暦二〇〇〇年には、サンフランシスコを抜いてサンノゼこそが、湾岸地域で最大の人口を抱

える都市になるだろう、とベイ・エリアの調査機関が予測したばかりだ。ハイ・テックは日本でもアメリカでも、うっとうしく低迷する産業を急上昇させる高性能エンジンのような扱いである。そうなれば景気のおこぼれをちょうだいして、フリーモントの空気も多少は陽気になるかもしれない。

しかし、それは楽観的な見通しというものだった。八〇年代に入って、にわかに脚光を浴びたシリコン・ヴァレーの景気にも、このところ微妙なかげりが見えてきたように、私には思われた。エレクトロニクス産業それ自体の成長が鈍化したというのではなかった。

この産業が産みだす製品は、たしかに感嘆を誘う機能を発揮するけれども、オフィス・コンピュータであれ、個人使用のワード・プロセッサやコンピュータであれ、これら商品が利潤をもたらすのは、あくまでも大量生産によつてである。生産し、販売する側の、昔から変わらないこの真実が、ようやく最近になって、頭をもたげてきた。微細な加工と精密な組立て技術が必要とするエレクトロニクス産業は、低廉な労働コストを求めて、間違いなく南部諸州や、あるいは海外に出ていくだろう。たとえば、メキシコへ、だ。カリフォルニア州のなかでも、とりわけ湾岸地域は賃金の高いことで有名なのだから。それが、アメリカ合州国をひとめぐりしてきた私の印象でもあった。

もっとも、そういう事情とは別に、サンフランシスコ湾岸地域の住民には、この街もいくらか知られている。ベイ・エリアを結んで走る、自慢のコンピュータ制御の通勤列車の終着駅のひとつがフリーモントだからである。これは、一九七二年に開通した。まるで日本の新幹線を三回り

ほど小型にしたような電車が、高架の上をのんびり走っている。サンフランシスコのダウンタウンからは、これだと五十分。三分間隔できたり、二十五分もこなかったりするから、過信は禁物だ。

どうやら写真は、駅前に茫洋と広がる空地を背景に撮ったものらしい。雑草が繁っている。自動車の国アメリカでは、銀行を建てたり、レストランやデパートやブティックを配置したりというような駅前繁華街の開発などはさらさら考えない。そういうものはフリーウェイ沿いの空地に建てればよろしい。実際、市域の二、三カ所に点在するショッピング・モールやレストランの赤茶けた照明が、夜の九時まで、静まりかえった郊外住宅の住人たちを誘惑している。駅前にはしたがって、ひたすら駐車場と空地があるばかりだ。

そして、もうひとつ、最近のフリーモント市が集めた関心がある。アメリカ最大の、というより世界最大最強の自動車メーカーのジェネラル・モーターズ（GM）と、日本最大にして世界第二位の生産台数を誇るトヨタとがこの街で合弁会社を設立して、コンパクト・カーの生産を開始したという話題である。アメリカの自動車メーカーは、ヨーロッパやアジアでたくさんの合弁事業を手がけているけれど、国内で外国企業と組むのは、これが最初なのだ。

そうした事情を観察してきた男は、いま新聞写真のなかで、新ピカの日本車のルーフに腕をのせ、精力的で思慮深そうな視線をカメラに向けている。

男は、私だ。

雨が落ちてきたのは、写真を撮られた四分後だ。二十六時間後には、私は日本に向かう飛行機

のなかにいた。それから九十六時間後、東京の住所に新聞の切り抜きが追いかけてきた。

私は車を運転しない。写っているホンダの新車は、インタビュールにきた新聞記者のものだ。外観はたしかに新しかったが、地図やカメラやメモ帳を乱雑に放りこんであって、運転者の性格がしみついた車だった。

「まいったよ」と若い記者は言った。「過日、トヨタからの出向社員に日本車の仕上がりと性能のよさをさんざん誉めちぎったんだよね。そしたら、どのタイプの車に乗っているかと聞かれて、うっかりホンダだと言っちゃったんだよ。相手は気を悪くしたんじゃないかな」

私の脳ミソは三ヵ月のアメリカ旅行のあとで、ぼうっとしていた。デトロイトを中心にミシガン、ニューヨーク、マサチューセッツ、オハイオの北東部四州の旅、ダラスを別にすればドサマわりというに等しいテキサス州への旅行、それにフリーモントやサンフランシスコを中心としたカリフォルニア州での滞在。厳寒の工業州から南のサンベルトを経て西海岸に到着したときには、荷物は冬ごもりに備えるクマよろしく百四十キロにもふくれあがっていた。

おなががグルグルいって、下痢になりそうなのを我慢してもいた。「目をもっと大きく開いて」と記者が注文をつけなかったら、きつと無残な顔に写っていただろう。私は、傷だらけの旧式ニコンの重たいシャッターが落ちる百二十五分の一秒だけ、カッコをつけたのだ。

メイド・イン・ジャパンの製品がやたらピカピカしているのを見るのは、私には気がめいることである。節操のない成り上がりの自画像を見せつけられるような気がする。だから、ポンコツ・ニコンを見たとき、ホッとしたのかもしれない。私は、瞬間、従順になった。

その日の朝早くに電話をかけてきた記者は、「きょうのランチ・タイムに会えないだろうか、食べながら話したほうがいいだろう。何を食いたい？」とたたみかけてきた。せっかちなのは、どこの国の新聞記者もまったく同じであるらしい。

「メキシコ料理がいいな」と、私はとっさに答えた。

電話を切ってから、私は、マリセーラ、とつぶやいた。テキサスと国境を接するメキシコの小さな街、マタモロスで生まれ育った十八歳の少女である。そこは、メキシコ湾に流れこむリオ・グランデ河沿いの小さな町だ。

こんな辺鄙な街に行ってみようと思ったのは、フリーモントでの日米ジョイント・ベンチャーの一方の当事者であるジェネラル・モーターズ社が、街の周辺に部品工場を三つも開設しているという話を聞いていたからだ。そのメキシコの町のはずれで生産されたダッシュボードが、はるばる西海岸の合弁工場まで列車運送されることになっていた。

私が滞在していたとき、ちょうど年に一度のフィエスタのシーズンだった。メイン・ストリートにあふれた群衆にまじって、彼女は、乱舞しながらいつまでもつづくパレードを、ぼつんとひとりで眺めていた。

フィエスタはリオ・グランデ河をはさんで向きあうマタモロスと、アメリカ側の街ブラウンズヴィルの両方で開催される。もともとはメキシカン・カウボーイの祝祭だ。マリセーラは、その日、国境の橋を渡って、パレードの規模のずっと大きいブラウンズヴィルに見物にきたのだった。ポニー・テールが、淡いブラウンのワンピースのファスナーに絡みついた。微風がくすぐったが

っているようだった。

雲間から漏れる南の湿潤な陽光が、マリセーラの大きな瞳とがった鼻梁をくつきりと見せていた。雑踏のざわめきが、ふいに静まりかえるように感じられた。もうひとつの雲間から射しこんでくるスポット・ライトが、私の全身を照らしだす。目が合ったとき、フィエスタの楽隊が、開幕を告げる陽気なファンファーレを奏でた。

私の年齢は、彼女の倍だ。

自動車広告の理論によれば、もっとも効果的な広告写真は、年齢差が微妙に開いている男女と当のクルマとを一緒に写しこんだものだそうである。夫婦ほど接近していず、親子ほどは離れていない年齢差こそがいい。歳かさのほうは男だ。不倫の匂い、人目をはばかる関係、刺激的な気配、誰もがひそかに夢みるときめき。エンジンをつけた鉄の箱は、ひそやかな経験にいざなり魔法の箱に変貌するというわけだ。

マリセーラはいつもガタピシのバスで国境の向こう側までやってきた。そして、私は歩いて、リオ・グランデにかかるアメリカとメキシコの国境の橋を渡った。インターナショナル・ブリッジと呼ばれる橋は、ほんの百歩で渡ることができる。マリリン・モンローが映画のなかで川下りをしたのは、どのあたりだろう。河原にはコーン・チップやビスケットやコーラの袋や缶が散乱しているばかりだ。

翌日の夜、インターナショナル・ブリッジを渡った広場で彼女とおちあい、アメリカ人観光客のこない、暗い小屋のようなメキシカン・レストランで遅い夕食をとっていた。私が自分の年齢

を明かすと、彼女はとまどった口調で言った。

「マタモロスにあるアメリカの工場で働いているメキシコ人のなかには、四十歳や四十五歳で死んじゃう人がいっぱいいるの。日本人の平均寿命は何年なの？」

彼女が、私の人生の残りの時間を計算していたのは、おおむねまちがいない。あと四年、うまくすれば、まだ九年ある。白黒のスペイン語のテレビのまわりでは、さっきから三匹の蛇が激しいダンスを舞っていた。画面はビタミン薬の宣伝がなりたてている。

私が「七十か七十五歳だと思うよ」と言う。するとマリセーラの頬には、ピンクの明りがともった。ほっそりした長い指で器用につまんでいたタコス私の唇に押しあてて、甘い微笑を浮かべた。「それなら私たちにはたっぷり時間があるっていうことだわ」

彼女がまちがいないく、私たちには、と言ったのに気づいて、いささか私はドギマギし、まっ赤なチリ・ソースがいっぱいかかったタコスにかじりついた。マリセーラのふるえるまつ毛とがった鼻と微熱を帯びた唇が、すぐ目の前にあった。……暗転……下痢がはじまったのは、その晩からだ。肛門の内側が焼けるように熱かったのは、そのとき無理に頬ばったメキシコ料理のせいにちがいないかった。

もちろん、こんな内密な事柄など、新聞記者に話しはしなかった。私は後悔していたのだ。インタビューを受けながらの料理としては、ひき肉やら野菜やらをくるくる巻いたタコスも、メキシコ風のオープン・サンドのトスタダスもひどく扱いにくいことに気づいたからだ。相手はといえば、サンドウィッチとコーヒード。